須川高原温泉から栗駒山天狗平/鳴子温泉《45 年振りの集まり》

日時：2026 年 10 月 8 日（木）　天候：晴

参加者：吉田、前田、砂川(OB)、原田夫妻(OB、OG)、深谷(OB)、大屋(OG)、石原(OG)、
渡邊夫妻(OG)、石井夫妻

コースタイム：須川高原温泉登山口 11:06⇒11:29 展望台⇒12:22 昭和湖(昼食)12:38⇒13:41 天狗平 13:48
⇒15:34 須川高原温泉登山口

☆距離：6.9km、△468m、▽469ｍ、 4 時間 28 分







吉田さん、前田さんと雪稜会 OB・OG メンバー12 名が集まって 45 年ぶりに紅葉の山と宴会を楽しむことになった。

予定より 40 分近く遅れて 10 人が須川高原温泉をスタート。登山口まで紅葉は山を下りていた。紅葉した樹木の間の道をしばらく進むと名残ヶ原湿原を見渡す展望台に出た。思い思いに写真を撮る。名残ヶ原湿原の木道は正面に栗駒山の大きな山体を見ながら草紅葉の中を楽に歩ける。苔花台付近まで来ると硫黄の臭いが立ち込め、沢を渡渉した跡、景色は一変して石が転がる荒々しい沢沿いの道となる。沢が尽きた所で昭和湖に出る。心配した硫黄臭は無かったので風は強かったが簡単に昼食をとる。4 人はここまでという事で、6 人が頂上を目指すことになる。昭和湖からは岩の階段状の急登となり、その後の山道は水が所々たまった泥んこ道となる。ころんだらとんでもないことになるのは目に見えていて、帰りの下りが心配となる。吉田さんと深谷さんが先行し、後方の女性３人と私との差がつく。時間を考えると頂上までは難しくなってきたので、稜線に出るまで進もうと言い合いながら進む。稜線に近づくと傾斜は緩くなり、灌木の中を進むと吉田さんが戻ってきて我々を迎え、すぐに稜線上の天狗平に出た。先行した男性２人も戻るというので、道標の前で写真を撮り、紅葉の山肌を愛でながら今来た道を戻り下山した。



夜は場所を鳴子温泉に移し、前田さんと砂川さんも合流して、昔の山行写真を見ながらの思い出話は深夜まで続いた。若い頃の仲間の繋がりのすばらしさを感じた一夜で会った。

翌朝には石巻から星澤さんも駆けつけ 13 人の記念写真を撮った。帰り路に、潟沼に寄り、道の駅でお土産を買い、古川駅で解散した。

（記録・写真：石井）

熊野古道小辺路

1.日程：2026 年 10 月 14 日（水曜日）～17 日（土曜日）
2.参加者：石井、原田晴、白石
3.コース：高野山上から伯母子岳、十津川、果無を経て熊野大社本宮へ
4.山行報告：1 日・日2目を原田、3日・４日目を白石、別にデータとして通しで石井が報告する。

1 日目（10 月 14 日）：高野山千手院橋集合⇒薄峠⇒大滝集落(昼食)⇒水ヶ峰⇒大股バス停→
ホテルのせ川泊









それぞれ別に前泊し、高野山金剛峯寺近くの千手院橋で落ち合う予定だったが、南海高野線終点の極楽橋からケーブルカーで乗り換えたところで合流できた。私は前日、早朝に横浜を出て真田昌幸、幸村親子が蟄居したことで有名な九度山からの高野参詣道朝石道を歩き慈尊院やその先の紀の川を一望する絶景ポイントを歩いて学文路にある民泊に戻って宿泊した。

初日朝は予報通り雨だったが、千手院橋につくころにはほぼほぼ止んだが、雨具を装備の上出発した。数分歩いただけで辺りはひっそりとしており薄暗い道だ。薄峠でアジア系アメリカ人に追い越される。彼とは翌日と最終日でも追い抜かれた。全般的に言えることだが、古から馬に荷駄を載せて歩いただけあって登山のような急登が少ないので歩きやすかったことと、あまり他のグループと出会うことがなかったように思う。薄峠からしばらく歩くとトイレと東屋がある大滝集落で昼食をとる。トイレも綺麗に整備されてありがたい。しばらく行くと竜神スカイラインを歩くが交通量がほとんどないので、恐怖は感じない。スカイラインを外れると今日の最高点である水が峰に至る上り坂が始まる。途中いくつかの茶店や宿屋跡を通り、初日の宿泊地の大股集落に着いた。小辺路は明治中期頃までは賑やかな往来があったらしい。大股集落からホテルまではミニバンで送迎してもらえて助かった。温泉が素晴らしく食事も完食で来た。豪州からの小辺路ツアーの事前打ち合わせの外国人やモンベルの関係者もいて夕食の場は賑やかだった。

（写真）左：出発地点の高野山千手院橋、右上：小辺路上の標識、左下：同じく標識、
右下：大滝集落手前にあるろくろ峠にて

2日目（10月15日）：ホテルのせ川→大股バス停⇒桧峠⇒伯母子峠⇒伯母子岳⇒三浦口バス停→民宿山本



二百名山の伯母子岳を目指す。途中の萱小屋は避難小屋になっており新たに用意されており、やかんもあってここでも泊まれそうだ。ここで前日のアメリカ人に抜かれる。この先の桧峠までは急な上り坂もあるがその先からは緩やかな道が続く。伯母子岳へは直登をせずに伯母子峠経由で山頂を目指してここで昼食休憩をとる。ここで熊野方面から来たニュージーランド人やほかのグループにも出会う。山頂からの眺めも素晴らしく、弥山や八経ヶ岳も遠くに望める。この先は遍路道が通行止めだったのでう回路を利用したがこの道が一番しんどかった。江戸時代は旅籠屋で昭和の初期まで人が住んでいた上西家跡を抜け、なんとか三浦口のバス停に辿り着いた。ここでまた民宿の車で送迎してもらう民宿山本さんも前日同様に食事もおいしく部屋も綺麗で全く申し分ない。今回は総じて宿泊先の選択が良く、リーダーに感謝だ。　　（記録：原田晴）







（写真）右上：初日の広い和室、
左上：伯母子岳への道、
右中：伯母子岳山頂、
右下：二日目の民宿山本で

3日目（10 月 16 日）農家民宿→三浦口バス停⇒三浦峠⇒三浦峠登山口⇒柳本橋⇒民宿太陽の湯

農家民宿山本さんに三浦口バス停まで送迎していただいた。

7 時20 分スタート。三浦峠までは登りは続く。

9 時 20 分に三浦峠に着く。トイレ休憩。珍しく反対方向から登山者 1 人やってきた。

奈良県の人で小辺路を何回かに分けて歩いていると話した。

西中バス停までは比較的歩きやすい道になる。

西中バス停に着いたのが 12 時 2 分、バスの時刻表では 14 時 2 分発、2 時間も待つのはイヤなので、

柳本橋まで約 8.5km 車道を歩く。舗装道路を歩くのがつらい。

気分を紛らわすのに民家の庭先の花を見たり、途中猿を見たりした。



原田さんはイヤホンをして何か聴きながら歩いていた。

柳本橋に 14 時 2 分に着いた。

十津川がきれいで、赤い橋の柳本橋が目立つ。この日は民宿太陽の湯に宿泊。

24 時間源泉かけ流し温泉　はとても良かった。

原田さんは何回も入浴して満足の様子。

4日目（10 月 17 日）

7 時 30 分民宿太陽の湯から出発、まずは果無峠登山口を目指す。

果無集落は世界遺産に入っている。8 時 11 分に果無集落へ着く。眺めが良く、周りの山々が見える。

果無峠まではひたすら登り。10 時 37 分に着く。

石井さんと白石は果無山山頂まで行ってみる。往復で 10 分でした。展望はなかった。

矢木尾バス停までは下りで歩きやすい。12 時 50 分に矢木尾バス停に着く。

道の駅奥熊野古道ほんぐうでトイレ休憩とみかんを購入する。みかんの甘酸っぱい味が疲れた身体にしみる。三軒茶屋跡は中辺路と合流する地点。インバウンドが結構いた。

14 時 40 分に最終地点の熊野本宮大社へ着く。3 人とも無事に歩けてよかった。

小辺路は人があまり歩かない静かな熊野古道だった。紅葉の時期はこれから。お疲れさまでした。（記録：白石）





葉が黄色になっていた

←最終地点の熊野本宮大社



↑民宿太陽の湯フロントにいた熊の剥製、今回は熊に遭遇しなくてよかった。情報では十津川村のどこかの場所で熊が出ました

《前記の山行報告の補助としてのデータ》

10 月 14 日(水) 高野山千手院橋⇒大股バス停 《距離：17.9km、△858m、▽1021m、歩行時間：6h5m》 天候：晴

コースタイム：高野山千手院橋 8:18⇒8:37 ろくろ峠⇒9:19 薄峠 9:24⇒10:08 御殿川橋⇒10:28 大滝集落東屋(昼食)10:47⇒11:25 高野竜神スカイライン合流点⇒11:36 野迫川村分岐⇒11:52 水ヶ峰分岐 11:57⇒12:15 水ヶ峯 12:48 東屋 12:58⇒13:35 平辻⇒14:23 大股バス停

バスを降りた高野山千手院橋では昨夜から降っていた雨が止んで、私はザックカバーをつけたままだが雨具もつけず傘も差さずにすみ、ラッキーな出発である。両側に建物が立ち並ぶ路地を４回曲がっていよいよ小辺路のスタート。舗装された急な坂道を登り始めるとすぐ杉木立の中となる。道は柔らかな土の未舗装路となり、しばらく行くと轆轤峠。なだらかな土の道をさらに進んでいくと後ろから東洋系のアメリカ人男性に抜かれる。無口な彼とはこの後も会うことになる。やがて最初の峠越えである薄峠に到着、最初の休憩を取る。この後かなりの急坂を下っていくと赤い御殿川橋に出る。そこからまた上り返して大滝集落を抜けた所にある東屋で早い時間であったが昼食を取った。なだらかな上り坂をしばらく行くと高野龍神スカイラインの自動車道路に出る。自動車道は奈良県と和歌山県の県境沿いにあり、県境を示す杭が所々にある。路脇には小辺路歩行者ありの看板や鹿が描かれた動物注意の看板があり、30 分程歩いて水ヶ峰分岐点で休憩。ここにはクマ出没注意の看板もあった。ここから自動車道路から左に分かれて柔らかい土の道を上って行くとピークらしくない所に、「左くまの右こうや水ヶ峰」の石柱の道標があった。暫く行くと右からの舗装路の林道に合流し、林道を下る事になる。樹林帯の中の道だが、開けた所に出ると、遠く伯母子岳が見える。遥か彼方なので明日あそこを越えられるのだろうかと不安になる。平辻で林道から右に山道に入り下っていくと舗装道路に出て、右に行くと立派なトイレのある大股バス停に到着した。電話で依頼すると「ホルのせ川」のバンが迎えに来てくれて、ホテルには 14 時半過ぎに到着した。当初の予約人数が多かったからだろうか、2部屋続きの広い部屋に案内された。この日一番先に到着したので広い風呂場で温泉に浸かった後、自販機の缶ビールで乾杯、このホテルには生ビールがある事を忘れていたことを後で悔やむ。



10 月 15 日(木) 大股バス停⇒三浦口バス停 《距離：15.7km、△1040m、▽1356m、歩行時間：6h54m》 天候：晴

コースタイム：大股バス停 8:04⇒8:54 萱小屋跡⇒9:47 桧峠 9:56⇒10:41 伯母子峠 10:44⇒11:03 伯母子岳(昼食)11:30⇒12:06 上西家跡⇒13:02 水ヶ元茶屋跡⇒13:58 待平屋敷跡 14:07⇒14:37 三田谷橋⇒14:57 三浦口バス停

三浦バス停までホテルのバンで送ってもらう。バス停から橋を渡り、すぐに舗装された急坂の上り路が始まるが、人家を過ぎるとやがて針葉樹の小石交じりの山道に変わる。萱小屋は立派な小屋で板敷きの上にはアルミ銀マットが敷き詰められており、シュラフもあった。但しトイレが無いのが難点。小屋を見ている間に昨日会ったアメリカ人が再び抜かしていく。小屋からの柔らかい土の路は針葉樹林から広葉樹林の下を歩くようになり、桧峠に着く。休憩後道は一旦少し下り伯母子岳頂上分岐点へ。この後、小辺路の路は直登せず、右手に伯母子岳をトラバースし伯母子峠へ。峠には避難小屋とトイレがある。この辺りは広葉樹が広がりわずかに色づき始めていたが、半月後の紅葉の時期はさぞかし素晴らしくなるだろうと思った。峠から三浦口に下る道は崩落の為の通行禁止の張り紙があり、右に進路を取って伯母子岳に上る。途中下ってくる男性と例のアメリカ人に会う。伯母子岳頂上は開けた所で 360 度の展望が広がる。3人の写真をセルフタイマーで何とか撮ろうとしていると、ニュージーランドから来た女性が現れたので3人の写真を撮ってもらった。頂上でホテルで作ってもらった豪華なおにぎり弁当を食べる。

頂上から迂回路となる道は斜面を下っていく登山道。今までの足に優しい小辺路の路とは違い脚は堪える。かなり下った後で左から峠からのトラバース道に合流、そのまま上西家跡、水ヶ元茶屋跡を通過し、道は石畳となって待平屋敷跡で休憩。伯母子岳からの急坂で堪えたのか脚は棒のようになり、つづら折れの急坂をやっとの思いで下って14 時半過ぎに舗装道路に出た。ここから民宿山本に電話し、迎えを頼み三浦口バス停まで歩いて自販機でコーラを買い車を待った。民宿山本は全部で4部屋ある事だったが、泊まったのは我々 3人だけであった。母屋は100 年以上前の家をリベーションしているとの事だったが、我々の別棟の部屋は水回りも新しく料理もおいしかった。三浦口の宿泊所は山本さん含め 2軒しかなく、予約できない人は次の宿泊地の十津川温泉まで春と秋に運航されるバスで片道 1時間 15 分(往復 8000 円)移動しなければならない。



10 月 16 日(金) 三浦バス停⇒十津川温泉 《距離 20.4km、△1122m、▽1309m、歩行時間 7h5m》 天気 晴
コースタイム 三浦口バス停 7:19⇒7:54 吉村家跡⇒8:37 三十丁の水⇒9:21 三浦峠 9:37⇒9:56 古谷倉跡⇒10:14 出店跡⇒10:37 五輪の塔⇒10:45 昼食 11:00⇒11:25 矢倉観音堂 11:30⇒12:00 三浦峠登山口⇒12:04 西中バス停 12:10⇒14:00 柳本橋(吊り橋)⇒14:24 太陽の湯

民宿山本さんのミニバンで昨日の三浦口バス停まで送ってもらい自販機前を出発、すぐに吊橋を渡る。民家の間の石畳の道を上り吉村家跡を過ぎ、三十丁の水へ。ここでは樹脂製のパイプから水がちょろちょろ流れていた。道は針葉樹林帯の下の暗い道を上って行く。峠の手前の開けた所からはふたこぶの峰の伯母子岳、そこから昨日苦労して下った尾根、麓の川沿いの村まで見渡せた。途中で飲んだアミノバイタルゼリーが悪さしたのか周期的に腹が痛み出し、三浦峠のトイレに駆け込んだ。三浦峠は林道と交錯しており、チェインソーの音もしていた。峠の東屋で休憩後、杉林の中をトラバース気味にゆるやかに下る。所々急坂にもなるが概して歩きやすい路。矢倉観音堂で一休み後、階段状の道を下り 12 時にバス道に出た。暫く歩くと西中バス停の前の閉まっている酒屋の前の自販機にはビールが売っていた。次のバスは14:02 なので優に 8km あるバス道を歩き始めた。ビールを飲みながら真夏のように感じる太陽を浴びながらバス道を 3人、思い思いに歩く。原田さんは音楽をイヤホンで聞きながら歩いている。突然歩くペースが速くなったり、ゆっくりなったり、後で訊いたら曲調で歩く速さが変わったとの事だ。ホテル「昴の郷」がやっと右下に見えてきた後、宿に直行せず、小辺路に沿って吊橋の柳本橋へ。この吊橋は結構揺れた。対岸の道を少し登って車道に出た後、赤い鉄橋の柳本橋を渡り返し、十津川温泉行者民宿「太陽の湯」に到着。ここも本日最初の宿泊者で 5階の入り口から一つ上がった 6階の 3部屋を充てられた。宿からは十津川とそこに流れこむ西川の合流点、そこに架かる赤い柳本橋が良く見える。24 時間かけ流しの家族風呂的な温泉風呂が 3つあり、24 時間入れる温泉が大好きな原田さんは大喜びであった。時間があったので浴衣に半纏を着て、町のスーパーまでアルコール等の買い出しに出かけた。夕食はイノシシ鍋。鹿肉のカツも美味しかった。この宿の難点は急な階段。6 階の部屋から 2階の洗濯機や 4階の食堂、2, 3, 5階の風呂の行き来は疲労した足には堪えた。

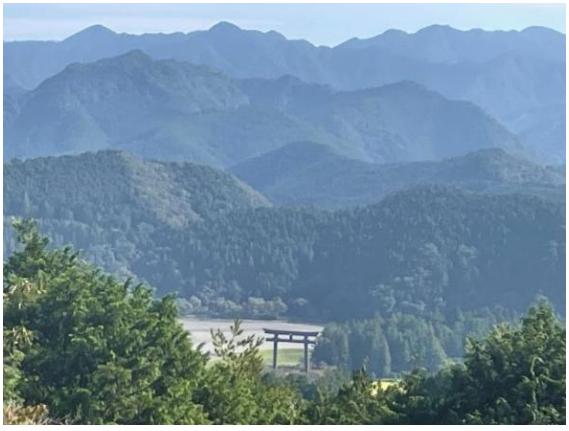


10 月 17 日(土)　十津川温泉⇒熊野大社本宮　《距離：17.0km、△1249、▽1313m、歩行時間：7h8m》天候：晴

コースタイム：太陽の湯 7:33⇒7:44 果無峠登山口⇒8:13 果無村 8:52 天水田 8:58⇒9:08 出口茶屋跡⇒9:35 果無観音堂 9:42⇒9:50 待機 9:58⇒10:27 果無峠⇒10:33 果無山往復⇒11:20 二十丁石 11:33 三十丁石(昼食)11:53⇒12:10 七色分岐⇒12:52 八木尾橋 13:18 道の駅奥熊野古道ほんぐう 13:26⇒13:50 三軒茶屋跡⇒14:15 展望台⇒14:41 熊野本宮大社



太陽の湯を 7 時半過ぎに出発。国道 168 号線を柳本橋を渡った後に右に折れ、しばらく車道を歩いた後、登山口から左に急な石畳の道を上る。30 分ほど登ると果無村の集落へ。道の傍らには花が活けてある丸太をくり抜いた水受けがあり、注いでいる水を一口いただいた。十津川温泉から熊野大社本宮までの小遍路沿いには 33 体観音石仏が設置されている。それを数えながら歩みを進める。暫く上ると平坦な空き地が現れた。天水田である。ここで明るい日差しの中一休み。出口茶屋跡を過ぎ、果無観音堂で休憩。上り道を出発してすぐに原田さんが観音堂に携帯を忘れた事に気付き引き返した。あまり時間が経った後ではなく良かった。10 時半頃、小辺路最後の峠、果無峠に到着。白石さんと私はザックを置いて果無山に上る。残念ながら果無山は展望が無かった。峠に戻り、八木尾に向かって下り始める。所々急な階段状の路が出てくるが歩きやすい落ち葉や土の路。粉末のアミノバイタルを飲んだせいなのか、最後の坂道と意識したせいか、快調に速く下れる。三十丁石では熊野川に橋が架かる本宮町が良く見渡せた。ここで昼食を取る。下り途中で例のアメリカ人に追い越される。七色分岐を過ぎ、さらに急坂や階段を下って 13 時前に道路に出て、八木尾橋を渡る。ここからはしばらく熊野川沿いのバス道。道の駅に寄ってお土産にみかん等を買い、アイスクリームを食べで小辺路歩きは終わった気分。しかしこの後道路はゆるやかに上り、三軒茶屋跡に向かって右に入る舗装路がきつかった。三軒茶屋跡まで来ると中辺路を歩いてきた人、観光客もで景色は一変。小辺路では1日目は例のアメリカ男性 1人、2日目はそのアメリカ人と反対方向に歩く2人、3日目は男性 1人、4日目はそれまでに例のアメリカ人と追い越した男性 2人組と、反対方向の外人 2人組の計 5人だったので、全くの別世界となった。ここから大斎原が見渡せる展望台までは最後の最後の上り坂。展望台からは下って熊野本宮大社へは裏鳥居から入る。ここで小辺路の歩きは終了。参拝した後、バス停に向かって帰途に就いた。



熊野古道小辺路、高野山から熊野大社本宮まで約 70km を 4 日間で歩いた。毎日峠越えがあり、毎日 1000m 程度の上り下りがあるが、歩行時間は 1日 7時間程度であり、宿がしっかり確保できていたのと途中で体調を悪くしたメンバーもいなかったのでほぼ計画通りに歩き通せた。総じて路は歩きやすい柔らかな土が多かった。石畳や階段状の所もあるが、伯母子岳の急な下り以外は往時人や場所によっては馬が通っていたからであろう。初日は雨を覚悟していたが、予想以上に早く止み、晴天の4日間の歩行は幸運だった。時期的には紅葉シーズン前の平日であったこともあり、会う人も少ない静かな山行が楽しめた。紀伊山地は高い山は無いが、山並みが幾重にも重なり、奥深い山域としみじみ感じた。

（記録：若林）